福山大学人間文化学部紀要
第5巻(2005) 31頁～ 38頁

保育者効力感研究の概観

三 宅 幹 子

保育者効力感に関する主要な先行研究と，その周辺に位置する研究の概観を行った。保育者効力感と類似した概念である教師効力感研究がさかんになされているのに比較して，保育者効力感研究はまだ少数であり，今後の発展が待たれる領域であるといえる。今後の研究の方向性として，保育者としての熟達過程を保育者効力感の側面から明らかにする研究の必要性が考えられる。そしてそのために，保育者の職務内容を包括的にとらえることのできる尺度の開発も必要であると考えられる。
［キーワード　保育者効力感，幼児教育，自己効力感］

1．はじめに

従来にもまして，幼児教育の重要性が声高に叫ばれている昨今であるが，幼児教育の質の向上のためには，幼児教育にたずさわる保育者（幼稚園教諭や保育士など）の資質の向上が非常に重要な要素であるといえよう。必然的に保育者養成機関には高い保育能力を有する保育士の養成が強く期待されているわけであるが，保育能力に関係する要因の１つとして，「保育者効力感（pre-school-teacher-efficacy)」という概念が提唱されるようになってきている。三木・桜井（1998）によれば，保育者効力感とは，「保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為をとることができる信念」と定義され，「教師効力感（teacher efficacyまたはteachers' sense of efficacy)」の保育者版ともいえるものである。

教師効力感研究は，Bandura（1977）の自己効力感（self-efficacy）の理論を応用・発展した研究領域であり，Gibson & Dembo（1984）による教師効力感尺度の開発以後，さまざまな研究がなされている（たとえば，桜井，1992，宮本，1995など)。自己効力感とは，ある状況において，ある結果を達成するために必要な行動を自分がうまくできるかどうかの予期であり（Bandura，1977)，社会的学習理論あるいは社会的認知理論の中核をなす概念の１つである。ある課題に対する自己効力感を自分がどの程度持っているかが，その個人の行動の変容を予測することが指摘されており（坂野，1989；坂野・東條，1986)，実際の遂行を規定する先行要因の１つであると考えられている。すなわち，自己効力感の高さが，課題や場面の選択，努力量，困難に直面した際の耐性を通じて行動の遂行に影響するのである。そして，このような自

己効力感の課題遂行の予測機能が重視された結果（中澤・大野木・伊藤・坂野・鎌原，1988），Bandura（1995），竹綱・鎌原・沢崎（1988），中澤ほか（1988），廣瀬（1998）などにおいて概観されるように，多くの領域にわたる研究が展開されていった。自己効力感の研究が大きく広がりを見せていることの１つの理由として，先に述べたように行動の予測機能が挙げられるが，それに関連して自己効力感と動機づけとの関連が密接で，動機づけ理論への寄与が大きかった点も挙げられる。すなわち，自己効力感理論以前の，学習性無力感（Seligman，1975）の考え方やlocus of controlの概念（Rotter，1966）においては，行動と結果の随伴性の認知に着目して，この随伴性の認知が動機づけの主要な決定因であるとしていたのに対し，自己効力感理論では，効力期待（efficacy expectancy；ある結果を生むために適切な行動を自分がうまくできるという確信）と結果期待（outcome expectancy；ある行動がある結果を導くだろうという個人の予測）とを区別してとらえたことにより（図１参照），行動と結果との随伴性の認知は保たれていても動機づけが高まらないという現象をも説明可能とした。すなわち，その行動が求める結果につながるとはわかっていても（結果期待が高くても），行動の遂行自体が自分には無理であると認知していれば（効力期待が低ければ），動機づけは高まらない。このように自己効力感は，達成行動と直接的に，あるいは動機づけを介して深く関わる概念である。

上述のように，行動に直結した概念であり，動機づけにも深く関わる自己効力感の問題を保育者養成において考慮に入れることは，有能な保育者の育成をめざす上で不可欠であろう。本研究では，保育者効力感に関する研究と保育者効力感研究の周辺について概観し，今後の研究の方向性について考察することを目的とする。

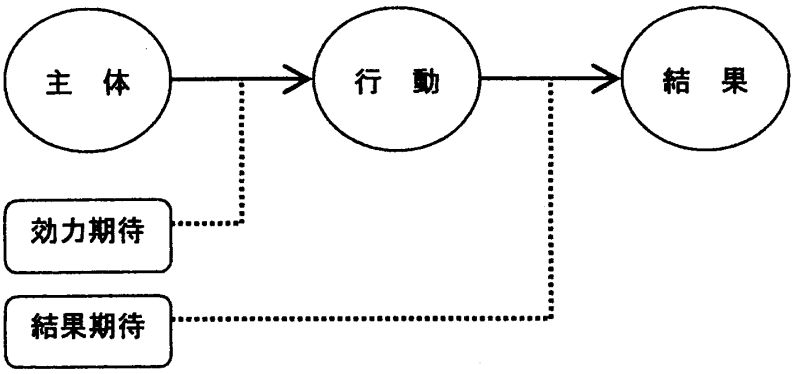

図１　結果期待と効力期待

２．保育者効力感研究の経緯

上記の部分で述べたように，保育者効力感は保育者育成において重要な概念であるといえる。しかし，実際にはまだ研究され始めたばかりで学術論文もごくわずかしかない。ここでは，保

育者効力感についての先行研究を概観し，その中で得られた研究知見をまとめてみる。

三木・桜井（1998）によれば，彼らの研究以前に保育者の効力感に着目した研究は，Gorrell & Hwang（1995）のみであるという。ただし，Gorrell & Hwang（1995）においては，幼稚園教諭養成課程の学生を対象に含めた研究ではあるが，使用した尺度はGibson & Dembo（1984）による教師効力感尺度の一部であり，幼稚園教諭に対応した尺度を使用しているわけではない。幼稚園教諭を含め，保育者や保育を専攻する学生に対応した，保育の独自性を考慮した効力感尺度をはじめて開発したのは三木・桜井（1998）である。そこでは，桜井（1992）の教師効力感尺度の項目をもとにして保育者効力感尺度を開発している。三木・桜井（1998）の保育者効力感尺度の尺度項目を表１に示す。

自己効力感理論をさまざまな領域へと応用していく際に，まずは尺度の開発から着手されていくのがパターンであるが，尺度開発以後の保育者効力感研究としては，保育専攻の短期大学生を対象とした，保育実習の経験が保育者効力感に与える影響を調べた研究（三木・桜井，1998）や，現職の幼稚園教諭を対象に，幼稚園教諭のストレス評価に保育者効力感が与える影響を調べた研究（西坂，2002）がある。

保育専攻の短期大学生を対象に，保育実習の経験が保育者効力感に与える影響を調べた，三木・桜井（1998）では，保育実習経験前に比べ，経験後には保育者効力感に上昇がみられたと報告している。そしてその上昇には，実習園が自分の期待に沿うところであり，たのしく実習できたという「実習園との合致感」が関係しているという。ところで，実習経験が教師効力感に与える影響を調べた研究をみると，経験後の学生の方が教師効力感が高いことを報告する研究もあれば，その逆の結果を得ている研究もあり，一貫した変化の仕方は報告されていない。その理由の１つとしては，実習経験前の評定が，学校現場を経験したことのない学生によるあまり現実に即したものでなかったため，評定の妥当性が低かった可能性が考えられる。しかし，教育実習の前後で教師効力感評定値に変化があったということは，実習での経験が教師効力感に何らかの影響を与えているとはいえよう。実習経験による保育者効力感の変容についても，さらなる研究の蓄積が求められる。

つぎに，幼稚園教諭のストレス評価に保育者効力感が与える影響を調べた西坂（2002）においては，保育者効力感は，幼稚園教諭のストレス評価の４側面（「園内の人間関係の問題」，「仕事の多さと時間の欠如」，「子ども理解・対応の難しさ」，「学級経営の難しさ」）のうち，「子ども理解・対応の難しさ」や「学級経営の難しさ」の２つのストレス評価の低さに関わっていることが示された。ただし，精神的健康への直接的・間接的影響は示されなかった。これと同種の研究として，蓄積疲労への効果を検討した田中（1999）があるが，そこでは保育者効力感の高さが蓄積疲労を軽減する要因になっていることが示されている。すなわち，保育者の心身のストレスに関するいくつかの側面に保育者効力感の高さが効果を持つといえよう。この分野においてもさらに詳細な研究が求められる。なお，西坂（2002）では，幼稚園教諭のストレス内

容をふまえて幼稚園教諭ストレス評定尺度を作成しており，幼児教育従事者のストレス内容を明らかにする研究としても草分け的なものであるといえる。

3．保育者効力感尺度について

ここでは，三木・桜井（1998）の開発した保育者効力感尺度（表１参照）について，やや細かく検討を加える。

まず，尺度の妥当性に関して，三木・桜井（1998）は，保育者効力感尺度の妥当性の検討のために，特性的自己効力感（坂野・東條（1986）の一般性セルフ・エフィカシー尺度による），内的統制感（鎌原・樋口・清水（1982）のLocus of Control尺度による）との関連を調べている。特性的自己効力感（generalized self-efficacy）とは，一般性自己効力感とも呼ばれ，人格特性とみなしうる，主として人間の行動一般に長期的に影響を及ぼす自己効力感であり

表１　保育者効力感尺度（三木・桜井，1998）の尺度項目

	項目番号	尺　度　項　目
	1	私は，子どもにわかりやすく指導することができると思う
	2	私は，子どもの能力に応じた課題を出すことができると思う
	3	保育プログラムが急に変更された場合でも，私はそれにうまく対処できると思う
	4	私は，どの年齢の担任になっても，うまくやっていけると思う
	5	私のクラスにいじめがあったとしても，うまく対処できると思う
	6	私は，保護者に信頼を得ることができると思う
	7	私は，子どもの状態が不安定な時にも，適切な対応ができると思う
	8	私はクラス全体に目をむけ，集団への配慮も十分できると思う
	9	私は，１人１人の子どもに適切な遊びの指導や援助を行えると思う
	10	私は，子どもの活動を考慮し，適切な保育環境（人的，物的）に整えることに十分努力できると思う
R		私が一生懸命努力しても，登園をいやがる子どもをなくすことはできないと思う
R		私は保育者として，クラスのほとんどの子どもが理解できるように働きかけることは無理であると思う
		私は，クラスの子ども１人１人の性格を理解できると思う
R		私が，やる気のない子どもにやる気を起こさせることは難しいと思う
R		私は，園で子どもに基本的生活習慣を身につけさせることはなかなか難しいと思う

注．10項目からなり，１因子構造である。Ｒは反転項目であることを示す。評定は「非常にそう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「あまりそうは思わない」「ほとんどそうは思わない」の５段階で求める。下欄に記載している５つの項目は，候補であったが因子負荷量の小ささから（｜.40｜以下）削除されたもの。

(Sherer, Maddux, Mercandante, Prentice-Dunn, Jacobs, Rogers, 1982；坂野・東條，1993；成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田，1995)，保育者自己効力感は，保育という限定された場面についての自己効力感である。すなわち，特性的自己効力感と保育者効力感とは，自己効力感の２つの水準として位置づけられるため，両者間には正の相関があると予測される。また，内的統制感に関しては，特性的自己効力感の高いものほど内的統制傾向が高い（たとえば，藤田・笹川，1991）ことより，保育者効力感との間の相関も正の相関になると考えられる。実際に，これらの各変数と保育者効力感尺度の尺度得点との間には，特性的自己効力感とr=.40，内的統制感とr=.23（いずれもp<.01）の相関係数が得られており，尺度の妥当性が示されたとしている（三木・桜井，1998)。

また，保育者効力感と幼稚園実習自己評価，幼稚園実習成績との相関も調べており，実習終了後の保育者効力感と幼稚園実習自己評価との間に中程度の正の相関を（幼稚園実習自己評価は３つの下位尺度にわけられ，それぞれとの相関係数がr=.33～.54，いずれもp<.01)，幼稚園実習成績との間には低めではあるが有意な正の相関（r=.18，p<.05）を得ている。

このように，三木・桜井（1998）の尺度はある程度丁寧に妥当性の検討がなされており，ほぼ満足な結果を得ているといえる。しかし同時に，保育実習前の尺度得点と幼稚園実習自己評価，幼稚園実習の成績との間には有意な相関はみられておらず，保育実習を経験する前の学生による評定の妥当性には疑問がもたれる結果になってもいる。これはこの尺度自体の問題とはいえないが，今後の研究で尺度得点を解釈する際に考慮しなければならない点であろう。

また，表１には，採択された項目だけでなく候補となった項目のすべてを示しているが，これらの尺度項目でカバーされている範囲は，比較的狭いように思われる。おそらく，保育の仕事に従事する者に広く使用可能な尺度を開発することをめざして作成したものであると推察される。よって，例えば幼稚園教諭のように保育者のなかでも特定の立場の職務内容に対応するようなものではない。この点で，職業的発達や熟達を詳細に評価するための尺度として用いるには限界があるように思われる。

4．今後の研究の展望

上記の概観をふまえて，ここでは今後の研究の方向性について考察する。学術論文の少なさから，まずは全般的に研究の増加が望まれるのであるが，教師効力感研究の展開を参考に，有能な保育者養成という観点からみると，以下の点が特に重要であろうと考えられる。

まず，今後の保育者効力感研究の展開の方向として，保育者としての長期的な熟達化のプロセスの解明に寄与する研究が望まれるであろう。すなわち，保育者の熟達化についての研究として，たとえば，職務の経験年数と保育上の問題への対処のし方との関係を検討した高濱(2000)のようなものがみられるが，保育者としての熟達過程を保育者効力感の変容という側面からも明らかにする研究が求められよう。そのためには，保育者の職務内容を全般的にカバーし，か

つ，なるべく具体的に評価できるような尺度の開発が必要となる。もちろん，三木・桜井(1998)による尺度も，初めて保育者効力感の尺度化を行った点で意義深く，保育者一般に適用可能な尺度であるという点では有用であるが，より詳細に熟達化のプロセスを明らかにするためには，より職務内容に即した職種別の尺度の開発が求められるであろう。

上記の保育者の熟達化の過程の解明は，保育者養成に大きな示唆を与えるものであるが，有能な保育者養成という観点からいうと，具体的なスキル修得との関連の解明もまた望まれる。たとえば，富田・田上（1999）のように保育場面の具体的な行動のスキル訓練の効果を調べる研究があるが，そういったスキル訓練の受講やスキル修得が保育者効力感にどのように影響するか，また，保育者効力感の高さとスキル修得のプロセスとの間にどのような関連がみられるかが明らかになれば，より効果的なスキル訓練や，訓練効果の評価に役立つであろう。

最後に，保育者効力感尺度項目の作成・選定に関する留意点として，保育現場で求められる職務内容の質の変容や重点の置き方の変化にも敏感に対応する必要が挙げられよう。例えば，幼稚園教諭の場合には，平成2年の幼稚園教育要領改訂以降，“幼児が自ら成長・発達していくために展開される遊びが学習であり，幼稚園教員はその学習活動を個人差に応じて「援助」する”という考え方が全面に強く打ち出された（富田・田上，1999)。このような観点に立ったときに，特に保育のどのような側面（あるいは具体的スキル）が重要であるかを敏感に反映した尺度の作成・使用が望まれる。

引用文献

Bandura, A. 1977 Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, **84**, 191-215.

Bandura, A. (Eds.) 1995 *Self-efficacy in changing societies:* Cambridge; New York: Cambridge University Press.

藤田 正・笹川宏樹 1991 女子学生における一般性 self-efficacy と Locus of Control の関係 奈良教育大学教育研究所紀要，**27**, 115-121.

Gibson, S., & Dembo, M. H. 1984 Teacher efficacy: A construct validation. *Journal of Educational Psychology*, **76**, 569-582.

Gorrell, J., & Hwang, Y. S. 1995 A studey of efficacy beliefs among preservice teachers in Korea. *Journal of Research and Development in Education*, **28**, 101-105.

廣瀬英子 1998 進路に関する自己効力感研究の発展と課題 教育心理学研究，**46**, 345-355.

鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 1982 Locus of Control 尺度の作成と，信頼性，妥当性の検討 教育心理学研究，**30**, 38-43.

三木知子・桜井茂男 1998 保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響 教育心理学研究，**46**, 203-211.

三木知子・桜井茂男　1994　保育科短大生の保育者効力感について　日本教育心理学会第36回総会発表論文集，274.

宮本正一　1995　教師効力感に関する研究　日本教育心理学会第37回総会発表論文集，581.

中澤　潤・大野木裕明・伊藤秀子・坂野雄二・鎌原雅彦　1988　社会的学習理論から社会的認知理論へ—Bandura理論の新展開をめぐる最近の動向—　心理学評論，**31**, 229-251.

成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子　1995　特性的自己効力感尺度の検討—生涯発達的利用の可能性を探る—　教育心理学研究，**43**, 306-314.

西坂小百合　2002　幼稚園教諭の精神的健康に及ぼすストレス，ハーディネス，保育者効力感の影響　教育心理学研究，**50**, 283-290.

Rotter, J. B.　1966　Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement. *Psychological Monographs: General and Applied,* **80**, 1-28.

坂野雄二　1989　一般性セルフ・エフィカシー尺度の妥当性の検討　早稲田大学人間科学研究，**2**, 91-98.

坂野雄二・東條光彦　1989　一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み　行動療法研究，**12**, 73-82.

坂野雄二・東條光彦　1993　セルフ・エフィカシー尺度　上里一郎（監修）　心理アセスメントハンドブック　西村書店　Pp. 478-489.

桜井茂雄　1992　教育学部生の教師効力感　日本教育心理学会第34回総会発表論文集，L1.

Seligman, M. E. P.　1975　*Helplessness: On depression, development, and death.* San Francisco; W. H. Freeman and company.

Sherer, M., Maddux, J. E., Mercandante, B., Prentice-Dunn, S., Jacobs, B., & Rogers, R. W.　1982　The self-efficacy scale: Construction and validation. *Psychological Reports,* **51**, 663-671.

高濱裕子　2000　保育者の熟達化プロセス：経験年数と事例に対する対応　発達心理学研究，**11**, 200-211.

竹綱誠一郎・鎌原雅彦・沢崎俊之　1988　自己効力に関する研究の動向と問題　教育心理学研究，**36**, 172-184.

田中昭夫　1999　保育者の蓄積的疲労感に及ぼす諸要因の効果　日本保育学会第52回大会発表論文集，124-125.

富田久枝・田上不二夫　1999　幼稚園教員の援助スキル変容に及ぼすビデオ自己評価の効果　教育心理学研究，**47**, 97-106.

三 宅 幹 子

Review of studies on pre-school-teacher-efficacy

Motoko MIYAKE

The purpose of this study was to review the studies on pre-school-teacher-efficacy. Contrast to many studies on teacher efficacy, a few researches were done on pre-school-teacher-efficacy. Only fundamental studies such as scale construction were seen, and more and more investigations were needed to give indications for pre-school-teacher education. Especially the studies on the relations of expertise and the changes in pre-school-teacher-efficacy were important for pre-school-teacher education.

[Key words: pre-school-teacher-efficacy, early childhood education, self-efficacy]